

史談会二十年の思い出

岩田正城

(会員 佐伯市柏江)

その一

尺間登山口にある尺間庵の宝篋印塔の修復作業が、昭和四十二年七月九日実施され、地元尺間の有志、昭和中学の協力、史談会弥生地区の泥谷、野下の両氏、佐伯から羽柴先生と私の二名が参加した。

その宝篋印塔は、建徳元年(一三七〇)一基、文中二年(一三七三)二基、天授三年(一三七七)一基の四基で、いずれも六百年以上経過した先人の遺してくれた貴重な仏教文化財だった。

当時、弥生町文化財調査委員だった伊賀重雄氏が、史談会誌を通じて謝意を述べられたが、その時誰が予想しただろうか、六年後の昭和四十八年八月、伊賀氏は年齢僅かに五十二歳で世を去られた。

私も若い頃諸会合や現地研修には、伊賀氏とよく行を

北川町老人会の方々の御尽力で、お頭様の社屋を改築し、その落成式に佐伯史談会も招かれたということですね。メンバーは先の尾高知行きと同じでした。

私もお頭様にお参りしました。

それから三十年、ほんの少しですが佐伯氏の姿が見えて来たような気がします。

佐伯史談会の御発展を祈ります。



共にしたものだだったが、氏のこの道に対する造詣の深さには深い畏敬を感じた。惜しい盟友を失ったものだ。

ところが、羽柴先生もその後昭和五十六年十月に惜しい生涯を閉じられた。

御健在の折りには日夜をついで史談会の運営にとり組まれ、或いは寸暇を惜んで会誌の編集に尽瘁された。後進の育成に催された名所旧跡の現場研修、又各地区集会は数知れなかった。もうその警咳に接することの出来ぬことは、何とも言えぬ断腸の思いである。

会長の高木先生も又仁慈の厚い方だった。凡庸な私達にまで知遍を以て接して下さった。

小人数の現地研修にはよく声をかけて下さった。石神峠は往年青山から日向三河内へ通ずる交通の要路だった。近年林道が改鑿されて車で峠越えが出来るようになった。先生はその峠の踏破を思いたれて昭和四十四年七月、御長男の車で染矢勘藏氏と私に、同道の機会を与えて下さり出発した。

ところが、峠の途中にがけ崩れのところがあったて車の通行が出来ず、やむなくひき返さざるを得なかった。

然し先生はそのことを断念されず、昭和四十五年十一

月再び決行、こんどは岩田義市氏を加えた四名で出発した。峠にかかって所要所で地元の染矢氏の説明を受けながら、こんどは支障なく峠を越えて三河内へ下った。

然し峠下の村落は奥地のこととて、人家は疎らで、蕪村の「こがらしや 何にせわたる家五軒」の句を思い出した。

然し異郷のこととて結構村々の風情を楽しみながら旅を終えた。未知の地を尋ねることはこの上なく楽しいものである。

余談で恐縮ながら戦時中、中国の湖南省洞庭湖畔の岳陽にあつた時、市内から高層の岳陽楼が望見できた。是非登ってみたいものと思っていたが、ある日戦陣のしじま一人で歩を運んだ、岳陽楼は街の西の楼門で、洞庭湖に面し風光絶佳なところだった。

七一年この地の郡主が時の文人と楼に登って、詩文を練ってから有名となり、杜甫もこの楼に登って作詩したそうである。そのような由緒の深い楼に登り得たことは、正に一期一会のことで、今でもその僥倖を楽しんでいる。

私の村には「村祈禱」と言う伝統の祭がある。世の中は変わってゆくけれどもその風習は堅く守られて、毎年正月には必ず行われる。その祭の状況や他郷での見聞も含めて、平成元年二月史談会誌一五〇号で発表した祭の淵源や変遷等についても、触れてみたいと思つたが、到底私の及ぶところではなかつた。

ところが、その翌三月には、若宮八幡宮の緒方先生から御親切な御書面をいただいて、村祈禱の淵源神事の内容等更に鶴岡地区における実施状況等についても、詳細な御教示をいただいて、私は疑念を一掃し、更に理解を深めることが出来た。その感謝の念と喜びの心は、もう十年を経過したが、嘗ての日も今日も聊かも変わつてない。

正田泉先生は本会の顧問であつたし、又郷土史の先覚者でもあつた。私も先生の御在世中時折りお手伝いしたこともあつた。昭和四十四年十二月九二歳で御逝去された。

先生が御生前蒐集された古文書の類も、多いことであらうと思つていたが、現会長の汐月氏が堅田川流域の

埋れた古文書文化財の発掘に努力されていたころ、正田家を訪れて明治三庚午年、宗恂と言う和尚の手になつた、「江国寺古記由来伝」と言う古文書を世に出され、その写本を私も頂戴した。私には滅多にない貴重な研究資料となつて、江国寺・常楽寺・我浄寺（今は廃寺）の古事来歴を、明らかにすることが出来た。

私が史談会にあること既に二十年を超えた。その長い年月私を生かしたものは、会員すべての人の助けの一事に尽きる。

